



# ブラジル特報



## 特集 「日伯スポーツ交流」

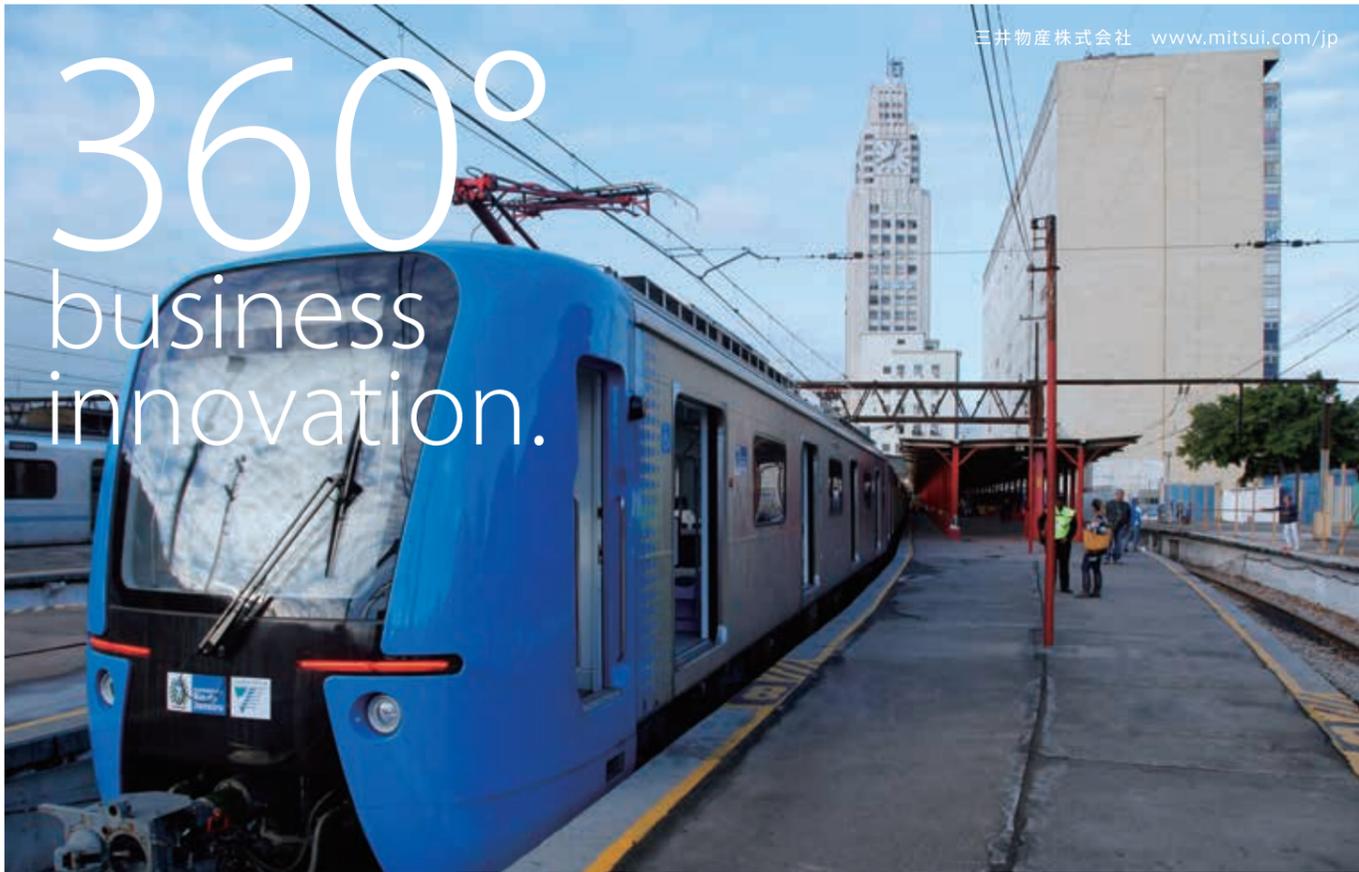
- ・期待されるリオ五輪の遺産
- ・カポエイラーこの豊饒なる世界
- ・カポエイラの国際化と日本における躍進
- ・フレスコボールという思いやりのスポーツ
- ・日系移民が普及させたブラジルの卓球

## あの町この町 マナウス



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail [info@nipo-brasil.org](mailto:info@nipo-brasil.org)



三井物産株式会社 www.mitsui.com/jp

360°  
business  
innovation.



## 世界の未来を、ブラジルとつくる。

### [Business innovation-1]

旅客鉄道事業に参画、400万人の市民の足を担う。  
オデブレヒト・トランスポート社と共に、都市交通インフラを整え、都市の発展に貢献。

### [Business innovation-2]

水力発電事業により、CO<sub>2</sub>排出の少ないエネルギー開発を推進。  
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

### [Business innovation-3]

ITを活用した教育事業で、次世代の人材育成に貢献。  
オンライン教育事業のギーキー社に出資参画。一人ひとりの効果的な学びをサポート。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産



MITSUI & CO.

## 目次

(あの町この町) マナウス [山岸照明]	3
(ブラジル・ナウ) ブラジルは本当に大丈夫か? [島内 憲]	5
【特集】日伯スポーツ交流 期待されるリオ五輪の遺産 [浜口伸明]	6
【特集】日伯スポーツ交流 カポエイラ—この豊饒なる世界 [荒川幸祐]	8
【特集】日伯スポーツ交流 カポエイラの国際化と日本における躍進 [脇さやか]	9
【特集】日伯スポーツ交流 フレスコボールという 思いやりのスポーツ [窪島剣聖]	10
【特集】日伯スポーツ交流 日系移民が普及させた ブラジルの卓球 [桔梗忠彦]	11
連載・ブラジル現地報告 邦字紙の存続意義を考える [堀江剛史]	12
(日系企業シリーズ・第39回) ブラジルでの新工場建設 [重年生雄]	13
(ビジネス法務の肝) ブラジル腐敗防止法に関する一考察 [松田純一]	14
連載★税務の勘どころ⑤ ブラジルの国家輸出振興計画(PNE)とは [エドアルド・ヴィトル/フェルナンド・マグリ]	15
(連載エッセイ) “プロタゴニズム”～ブラジルの エイズ当事者運動から学ぶこと [下郷さとみ]	16
(ウーマン・アイ) レコーディングで訪れたリオにて [Nanami]	17
(ジャーナリストの旅路) ブラジルで広がる日本のB級グルメ [中島 昇]	17
(連載文化評論) フィールズ賞受賞のアヴィラ博士と数学研究のメッカ IMPA	18
[岸和田仁]	
最近のブラジル政治経済事情	19
新刊書紹介	20
(びっくり豆知識) ブラジルは難民では「おもてなし」の国?	20
協会からのお知らせ	21



写真家田中克佳の「表紙のひとこと」  
スポーツが日常にあるリオデジャネイロ。とりわけビーチは様々な競技会場へと様変わりする。写真はビーチバレーの国内トーナメントの様子。街にまもなくオリンピックがやってくる。  
(65年生まれ、早稲田大卒、博報堂入社。93年に退社後渡米し、独立。ニューヨーク在住。www.katsutanaka.com)

あの町、  
この町

## マナウス

マナウス市はブラジル北部アマゾナス州の州都であるが、アマゾン河口より河川距離1,700km、アマゾン熱帯雨林の真ん中に位置している。気候は正に熱帯の高温(平均30-35度)多湿(平均89%)で12月~5月雨季、6~11月乾季、である。アマゾナス州は、ブラジルの広大な州で、日本全土の約4倍の面積である。マナウス市はリオネグロ左岸に位置し、過去346年、極めて数奇な歴史を経て今日に至っている。

アンデスを越え、アマゾン河を下って覇権を狙うスペイン勢を防ぐためポルトガル軍が1669年に備えた砦(サンジョゼ・ド・リオネグロ)が発端である。1848年マナウス市が制定されたが、「マナウス」という名称は砦周辺に居住するインディオ、マナオス族より取った名称と言われている。

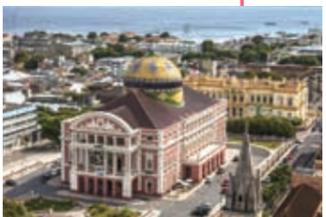
19世紀末より20世紀初頭の天然ゴムの世界的需要はマナウス市へ多大な「富」を齎し、ブラジルのGDPの45%を担った時期もあった。当時世界の三大劇場の一つに数えられたオペラ劇場は全ての材料を欧州より輸入し1898年に完成、ブラジル初の電気が点灯し、市内電車が走り、また1909年にはブラジル初の連邦総合大学が開講している。

しかし、東南アジアでゴムの栽培が開始されると、1915年頃にはアマゾンのよりの出荷は止まり、マナウスは凋落の一途を辿る。

1930年代に入ると日本より農業移民が入植、インド麻の栽培に成功し、アマゾナス州の経済は一息つく事が出来た。

1967年に至り時の軍事政権は、折からの外貨不足を補う為、マナウスを経済特区として税制恩典を与え、工業誘致を始めた。この計画は見事に成功し、発令当時、人口15万人のマナウスは、約半世紀を過ぎ200万都市に発展した。世界の有名企業が進出を果たし現在内外の企業をあわせ約500社が操業、日本よりの企業もパナソニック、ソニー、HONDA、ヤマハ等々30数社が操業し工業団地のリーダーシップを握っている。

山岸照明 (アマゾナス日系商工会議所元会頭)



# グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR (Human Resources) 情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

## 日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET  
http://career.nikkei.co.jp

## キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結び人材紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っていきます。

日経HR  
Executive

プロフェッショナル、エグゼクティブのための転職支援サービス

20代、30代のための  
転職支援サービス

日経HR  
AGENT  
NIKKEI HUMAN RESOURCES

## 日経アジアリクルーティングフォーラム

アジア9カ国のTOP大生を日本へ招待し、面接できるイベントを毎年8月に開催しています。2014年は北京大学、シンガポール国立大学、チュロンコン大学、インドネシア大学等、103名が来日し30名が内定獲得しました。

NIKKEI ASIAN  
RECRUITING  
FORUM  
in 東京



## 日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。

日本  
経済  
新聞



仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR  
NIKKEI HUMAN RESOURCES

お問い合わせ 株式会社日経HR TEL:03-6812-7307  
e-mail:webeigyo@nikkeihr.co.jp https://www.nikkeihr.co.jp



## ブラジルは本当に大丈夫か？

11月末に突然、12月2日から予定されていたルセーフ大統領訪日中止の連絡があった。2013年6月に次ぐ二度目の「ドタキャン」である。一部で「日本軽視」の声が上がっているが、筆者はブラジリア勤務時代に、当時ルーラ前政権の文官長を勤めていた同人の親日振りを目の当たりにしている。訪日中止は、大統領として本当につらい決断であったに違いないと思っている。真にやむを得ざる事情があったことは、その後の目まぐるしい内政の動きからも明らかである。

### ブラジルの現状～想定外の政治経済危機

ブラジルは、今頃、五輪景気に沸き返っているはずだった。ところが、そのような内外の期待を裏切り、景気は悪化の一途をたどっている。政府のガバナビリティーも著しく低下している。今回の大統領の訪日中止も、小康状態にあったはずの予算審議の突然の停滞により、連邦政府のシャットダウンの恐れが現実のものとなったことが原因である。

現在ブラジルは、経済と政治、そして、内的要因と外的要因が複雑に絡み合った複合的危機の最中にある。2015年の経済成長率は3%以上のマイナスが確定、16年も急回復は期待できない。その原因は資源価格の低迷など外的要因だけではない。最近の経済指標は資源依存度がブラジルより高い新興国に比べても悪い。問題は政権の対応にあると考えざるを得ない。財政規律の緩みによりインフレが悪化したのみならず、市場に対する政府の過剰な規制や介入が企業の投資意欲を削いでしまった。

一方、国有石油会社ペトロブラスの汚職問題を契機として政治情勢も泥沼化しており、大統領の弾劾手続き開始という深刻な事態に立ち至っている。

### 経済政策は漸く本来あるべき方向

経済政策は危機対応モードに入っている。遅きに失した感はあるが、有能な財務大臣の下で、財政赤字削減とインフレ抑制を中心とする政策を最優先で進めており、国際的にも一定の評価を得ている。もう一つの重要課題である保護主義的な貿易政策からの脱却についても、メルコスール(南米南部共同市場)偏重を見直し、域外との関係強化を模索する動きが出始めている。

もとより、インフラ整備、税制改革、労働制度近代化、公務員年金制度の改革等取り組むべき課題は依然として山積し

ているが、少なくとも放漫財政や構造改革先送りが如何に高くつくかが認識されるようになってきている。今般、隣国アルゼンチンの大統領選挙で市場経済重視の変革を掲げたマクリ候補が当選したことがブラジルの背中を更に押すことを期待したい。

### ファンダメンタルズは抜群に強い

ブラジルの長期的見通しは、依然として明るい。このことはしっかりと押さえておく必要がある。資源の多様性と豊かさや食料生産能力は世界有数である。そして、忘れてならないのは、今日のブラジルは80年代と全く違う国になっていることである。経済規模で、欧州の主要先進国と肩を並べ、航空機製造、食糧生産など一部分野では世界をリードするようになっている。政治的には、民主主義が自然な形で定着し、外交面では、国際社会の安定勢力となっている。また、国内的には民族、宗教、人種などに根ざす不安定要因を抱えておらず、新興国随一の政治的安定を誇る。ブラジルは恵まれすぎている位恵まれている国である。短期的には厳しい状況が続こうが、必ず現下の危機を乗り越え、より良く、より強い国になるものと確信している。

### 我が国との関係

ルセーフ大統領の訪日中止は誠に残念であったが、両国関係の基盤は依然、強固である。今後、我が国として、次の二点に留意してブラジルとつきあって行くべきである。

#### (1) ブラジルの目標は先進国入りである

ブラジルは、内心では新興国より先進国に親近感を抱いている。そういうブラジルを他の新興国と一括りにしてはならない。ブラジルにとって、BRICSとの関係、とりわけ中国との関係は、必ずしも居心地の良い関係ではない。ブラジルの目標はあくまでも先進国入りである点を見落としてはならない。

#### (2) ブラジル人の対日信頼感は絶大である

ブラジルほど日本と日本人に絶大な信頼感を持っている国はいない。そういう国が存在することは、我が国にとって貴重な資産であり、我が国はこのことを忘れることなく、グローバル外交を展開する必要がある。そうしない場合、損をするのはブラジルではなく我が国であることを銘記しなければならない。

島内 憲 (日本ブラジル中央協会副会長、元駐ブラジル大使)

# 期待される リオ五輪の遺産

2016年開催されるオリンピック・パラリンピックのリオデジャネイロ大会に向けて、現地では急ピッチで会場および関連施設の整備が進められている。アスリートたちがどんなに素晴らしいパフォーマンスを見せてくれるのか、特に日本人選手の活躍が楽しみであるが、ここではそのことはさておいて、オリンピックの遺産（レガシー）がリオデジャネイロ市をどのように変えていくのか、都市交通システムの影響を中心に紹介してみたい。

筆者がリオデジャネイロに滞在した2015年2月から5月頃、中心市街地（セントロ）地区では車の交通が大幅に制限され、路面電車（ライト・レイル鉄道：VLT）の建設が進められていた。導入されるVLTはフランスAlstom社製の超低床型で、車両の上に架線がなく線路から電源を取る方式の見た目もすっきりしたものである。リオ市が作成した資料(図1)によると、VLTの経路は、国内線航空専用のサントス・ドゥモン空港、地下鉄駅、セントラル鉄道駅、ニテロイ連絡船発着場キンゼ広場、長距離バスターミナル Novo Rio を通り、これまでつながりがなかった公共交通を結ぶ役割を果たす。中心市街地のバス運行量を減少させることができ、交通渋滞が緩和される効果も期待できる。それとともに、市民劇場や国立図書館があるシネランジア、カリオカ広場の商業集積、リオブランコ大通りのオフィス街、カンデラリア教会、といったセントロの主要スポットを経て、港湾地区の再開発の目玉として新装オープンしたリオデジャネイロ美術館（MAR）と50年先の地球環境と都市をテーマにした「明日の博物館」を中心に

拡張されたマウアー広場、2016年にオープンが予定されている南米最大の水族館 AquaRio、エスコーラ・ジ・サンバのショーが見られるシダーチ・ド・サンバ、などを巡って、市民の娯楽と観光の足の役割を果たすことも期待されている。

リオデジャネイロ市の経済が1980年代以降沈滞してセントロの治安が悪化したのにもない、訪れる観光客がナイトライフを楽しむのは市南部海岸地域（ゾナ・スル）のコパカバナ地区やイパネマ地区などに限定されるようになった。対照的に、夜間・週末のセントロは閑散として近寄りたくなってしまった。VLTの敷設とセントロと港湾地区の新たな車の動線としてすでに開通した市制450年記念トンネルの効果が相まって、荒廃している港湾地区の再開発がリオの再生のシンボルになるかもしれない。先行例

図1

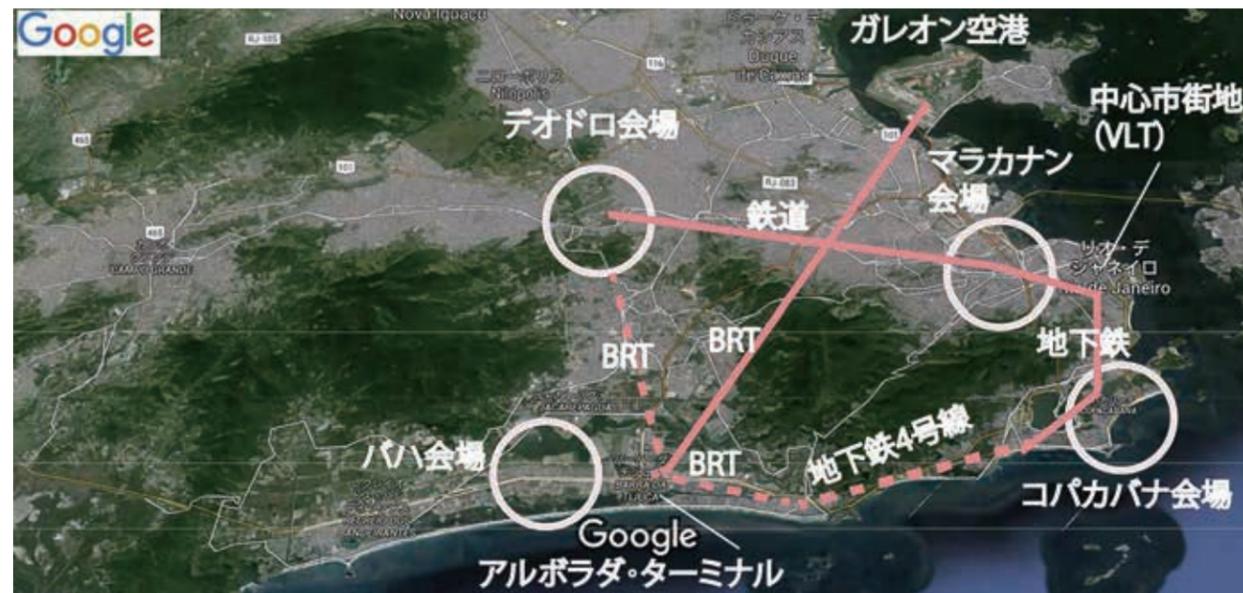


浜口 伸明  
(神戸大学教授)

は、セントロ西部に芸術家が集うボヘミアンな雰囲気のラバ地区だ。過去10年余りの間で治安が回復して凋落から回復し、レストラン、バル、ライブハウスに毎夜多くのカリオカが詰めかけて、今やイパネマやコパカバナを凌ぐ賑わいを見せている。空き家が多くなって雰囲気が悪化していたボタフォゴ地区の旧邸宅街も、近年一部がリフォームされてレストランやバルとして使われるようになって、高級グルメ街に生まれ変わりつつある。どことなく人を寄せ付けない雰囲気のあったリオが、旅行者に対してフレンドリーな都市になっていく期待が高まっている。

オリンピックのメイン会場が設置される市の西部地域バハ・ダ・チジュカ地区（バハ）の統合が進むことにも期待したい。近年、居住地がすでに満杯状態のゾナ・スルからバハのより広い住環境に移住する動きが進んだが、事業所があまり立地していないバハは生活するだけの街として発展し、バス以外の公共交通機関がなかったこともあって、住民は長距離の車通勤を余儀なくされてきた。バハとゾナ・スル間の自動車交通の隘路となってきたサンコンハード海岸の高架道路の拡張工事がオリンピックまでの開通を目指して進められているほか、現在イパネマが終点となっている地下鉄1号線と接続して西に延びる地下鉄4号線の工事を進めており、開通すれば、植物園、ガヴェア地区、サンコンハード地区を経てバハの東の端に達し、そこからバハの中心にあるアルヴォラダ・バスターミナルまで専用レーンバス（BRT）で結ばれる。アルポラダ・バスターミナルとガレオン国際空港の間を結ぶBRT トランスカリ

図2



オカ線はすでに開通している(図2)。

競技の一部はコパカバナを中心とするゾナ・スルや、2014年サッカーワールドカップに合わせて整備されたマラカナン競技場の周辺施設でも開催されるが、リオ市があえて競技の一部をバイシャーダ・フルミネンセ地域のデオドロ地区で開催することにしたことに注目している。バイシャーダは北部・北西部の郊外に広がる低所得層の住宅地であり、リオデジャネイロ大都市圏の労働供給を支えている。リオデジャネイロ州で最も多くの人口がこの地域に集中しており、この地域から毎日数百万人が長時間バス・電車・地下鉄を乗り継いで仕事のあるセントロ地区やゾナ・スルに通勤している。

ところがこうした通勤事情にリオ独特の地形が影響を与えている。グアナバラ湾から突き出たポン・デ・アスカルはリオ市のシンボルの一つであるが、実は市内の至る所に同じような岩山があって交通を遮断している。たとえばボタフォゴ地区からコパカバナ地区へは、今でもシケイラ・カンポス大通りに出る旧トンネ

ルカプリンゼザ・イザベル大通りに出る新トンネルのどちらかを通る以外に行きようがない。リオ市の住民が地理的にも社会階層的にも分断されているのは、存外、こうした地形に原因があるかもしれない。

バイシャーダとバハの間にも大きな岩山があるので、直接の交通が阻まれている。セントロを経由して公共交通機関で移動すると2時間以上かかるため通勤するのは不可能である。リオ市はバハのメイン会場とデオドロ会場をトンネルで結ぶBRT トランスオリムピカ線を設置して、イベント中の観客のモビリティを提しようとしているが、これが将来通勤者の足として機能すれば両地区間の移動時間が半分以下に短縮される。これにより労働力供給が可能になれば、商業・業務地区としてのバハ地区の発展の可能性が高まるだろう。バイシャーダの住民にとっては雇用の機会が増加するし、バハ住民は勤務地がバハ地区内で働けるようになれば長距離自動車通勤から解放されることになる。

もちろんオリンピック開催には懸念さ

れる問題も残されている。最も重大なのは治安の維持であろう。もともとリオで犯罪が多発していることに加えて、2015年11月にフランス・パリで同時多発テロが起こったことにより、オリンピックが標的にされる可能性が排除できなかった。この他にも競技会場となるラゴア（湖）やグロリア・マリーナの水質浄化が十分進んでいるとは言えない状況にあり、デング熱の感染源となる蚊が2015年に東北ブラジルで拡大した小頭症との関連が疑われるジッカウイルスを媒介することがわかり、リオでも発症例が増えている。しかし、ここで述べたようにオリンピックの遺産はリオが抱えてきた問題の一部を改善に向かわせる効果を持つことが期待される。まだ工事が終わっていない段階で言うのはいかにも気が早いですが、これまで分断されてきたリオ大都市圏がオリンピックを契機に建設される新しい交通網によって結びつきを強めることは、経済を活性化させ住民の満足を上昇させることができるのではないだろうか。

# カポエイラ この豊饒なる世界



荒川幸祐  
(写真家、カポエイラ指導員)

現在まで私の理解するカポエイラとは、ブラジル在住期間での経験、世界各地で見てきたものを踏まえて感じられたことと、主に自分の師範 (Mestre) や経験者から教えてもらうことを基軸としたものである。カポエイラにはたくさんの流派と教えがあり、その中でも私が学ぶのはカポエイラアンゴラのグループ、インジンガである。この世界では珍しい女性師範 (ジャンジャとパウリーニャ師範) を持ち、カポエイラを通して教育的な観点や人権問題にも目を向けさせられる、大変尊敬のできる師範である。

今回はカポエイラ全般の説明として、私なりに理解するカポエイラアンゴラからの観点で物事を見ていることを理解していただきたい。

## カポエイラとは

カポエイラとは身体表現と音楽を通した、深い学びの場である。

ここで学べるものはブラジルの異種混雑とした文化の中でも、強いアフリカからの影響を持つアフロブラジル文化である。カポエイラには自身によって自由という喜びを勝ち取ることで、そして現在でも続く根強い差別と偏見への抵抗と理解を得るための闘いが秘められた術なのである。これはブラジル国内や黒人系だけによる問題ではなく、全人類における最大の目標点、愛と平和と平等への一歩にも繋がる共通点だと信じている。

カポエイラは円になり、特有の楽器 (主としてピリンバウ) を奏で皆で歌いながら、その中で演舞を行う。しかしそれはお祭りの日のように、希少なタイミングでしか行われることがなく、我々のようにカポエイラを学ぶカポエイリスタは普

段は淡々と練習に励んでいる。カポエイラには流派と教えによって、若干な部分から大きなものまで違いがある。師範から伝えられた動きとリズム、歌があり、それをグループ全体で練習をし学んでいくことによってグループの作り上げるエネルギーの強さを増していく。これは時間をかけて長く練習をすればするほど美しいものが形成されていく。年齢や性別に縛られることのないカポエイラはコミュニティ作りとしても重要な役割を果たし、今日では重要な文化としてブラジルを始め全世界から認識されるようになった。

## ジンガと即興性

動きは基本ステップ、ジンガから始まる。私の流派では、ジンガは個々の個性であり、似たものはあっても二つと同じものは存在しないと教わっている。重要なカポエイラの基本ステップをカポエイリスタは反復運動の練習を続け、リズムとともに手足が揃い、身体に馴染むように何度も何度もジンガを踏み続ける。ジンガは奏でられる音楽のリズムに合わせて、バンドとダンサーの関係のように演奏と一体となる。

音楽が演奏される円の中で演舞をする二人は、向き合ってジンガをし、相手との呼吸を合わせ、そこから即興の遊びが始まる。遊びの中には闘いの要素があり、攻撃と避け技を使って巧みに相手とのコミュニケーションを楽しまないといけないのである。ジンガ、蹴り、避け、側転。手足を巧みに動かし、体のバランスを使い、上へと下へ、前後左右へクルクル回る。全身を使った奇妙にも思える動き、しかし筋肉とバランスを融合させた簡単

ではない動きである。

遊びの中には、正々堂々としたコミュニケーションの他に、相手にとっては避けにくい (時にはダメす様に) 技を出したり、タイミングを狂わせたり、びっくりさせるような技を出したりといったユーモアも求められる。これらは皆が同じことをするように教えられるものではなく、人から人へと伝わり、即興性と発想力のある楽しさの要素である。特に一つのグループとしての独自のユーモア性も強く感じられる。

演舞の始まりから終わりまでは、長い経験から培った感覚によってそのグループの師範がピリンバウを弾きながら取り仕切る。

## カポエイラの教え

カポエイラの中の教えとは、師範と生徒の密接な信頼関係、日々の練習の中でグループの中で仲間と過ごす時間の中で学ぶものではないだろうか。カポエイラの練習では動きや音楽の練習だけでなく、会話を通して情報交換をすることが多い。多種多様な文化と人種が混ざるブラジルの環境の中、カポエイラは日々の生活の中で反映され、自身の精神的自由を求めたより良い世界を作り上げる一つのメソッドとして活用される。カポエイリスタは自身の信じるものを続けていくために、カポエイラを通して人間としてのより良い行いを再認識し、己を知り、仲間との交流を深め、先人より伝承される教えを学び続けている。



© Kosuke Arakawa

# カポエイラの国際化と 日本における躍進



脇さやか  
(カポエイリスタ)

## ロンドン五輪閉会式

リオへ続くロンドン・オリンピックの閉会式では、ブラジルを代表するアートとして、スポーツとして、カポエイラが舞われていた。2014年にユネスコの世界無形文化遺産に登録された、この揺れるようなリズムに乗せた華麗でユニークな表現「カポエイラ」はもはや「ブラジルらしさ」を表現する時に欠かせない存在となっている。日本に伝わって20年を数えようとしており、北海道から沖縄まで、全国40団体以上の団体が活動している。

## カポエイラの国際化

“危険な格闘術”として法によって禁止されていたカポエイラであるが、1930～50年代にかけようやく合法化し市民権を得たのち、現在までどのように世界へ、そして日本へ広がっていったのだろうか。

カポエイラをする人たち、“カポエイリスタ”が移動する時、その背景には労働とブラジル経済の変動がある。カポエイラは16世紀に労働力・奴隷としてブラジルへと連行されたアフリカの人々を起源に生まれ、常に苦役と抑圧の歴史を生き延びてきた。合法化後もカポエイリスタの殆どは労働階級の人々で、つまり仕事のあるところに人々は移動し、抑圧と生活困難を抱えながら、そこにカポエイラが発生したのである。日本ではカポエイラはオシャレなスポーツの印象が強いかもしれないが、ブラジ



では、自由を求める抵抗の象徴であり、下層階級の民衆文化活動という差別的な視線を長い間受けていた。

60年代の工業の進展によって、カポエイラの中心地であった北東部バイアから、都市部サンパウロ、リオへと多くの労働者が移動し、カポエイラも国内各所へ広がっていった。労働の休息にカポエイリスタたちはホーダ (輪) を囲み、故郷バイアへの想いを馳せ、音楽にのせてカポエイラを楽しんでいた。そうした中60-80年代にかけて、世界へ進出していく人材やグループが生まれ、主に北アメリカや西欧においてグローバル化が進んでいった。

日本におけるカポエイラの発祥は1990年代で、日系移民のビザ緩和で日本へやってきたデカセギの人々と共にカポエイラが日本へ渡り、大泉市、浜松市、豊橋市、鈴鹿市などの工業地帯でブラジル人を中心としたグループが興った。どの時代もそうであったように、新天地ではカポエイラがブラジル人たちにとって困難の多い現実生活の癒しであり、レクリエーションであり、出自の異なる人たちでの共同体の形成のために重要な活動であった。

その一方で“日本生まれの日本人によるカポエイラ”は発生が異なる。「鉄拳」などのゲームキャラクターからカポエイラと出会い、アメリカ発の映画「オンリーガストロング」などから格闘術として、またはブレイクダンスに影響を与えた動きとして、カポエイラをカッコイイと感じた日本の若者たちがカポエイラを始めた。日本人のカポエイラは「ジャポエイラ」と皮肉られたが、彼らは本場のカポエイラを求めてブラジルへ渡り、ポルト

ガル語、音楽を学び、謙虚にブラジル文化を理解しようと努め、練習に励んだ。その姿はブラジルのメストレ (師範) たちの信頼を勝ち取り、正式に弟子となったカポエイラを日本へ持ち帰り支部を始めた。今日ではほぼ毎月、日本各地で著名なブラジル人メストレが日本へ招聘されており、日伯国際交流イベントが活発に行われている。

## カポエイラと多文化共生

今後日本ではフィットネス産業やエンタテインメント業界を中心にカポエイラのニーズが更に高まるであろう。しかし、むしろ注目すべきはカポエイラがもつ教育と多文化共生への力である。諸外国からの労働力なくしては産業が成り立たない現代日本で、カポエイラはブラジル国籍の青少年の自己形成に有益だけでなく、言語を超えたコミュニケーションを可能にし、日本人にとっても多様性を学ぶ学びの場となるからだ。カポエイラは単なる格闘術ではなく文化表現でもあり、様々な出自、性別年齢にかかわらずともに楽しむことができ、自他を尊重すること、調和のこころを身につけることができる。もちろん油断をすればブラジル流のマリーシアにやられたり、派手なアクロバットに気を取られているうちに足元に転がされていたり…このようなブラジルらしいやりとりや生き様が「ジンガ」というステップとリズムにのせ、豊かに息づいている。ぜひみなさんも、一歩をジンガで踏み出して、カポエイラの世界を体験してみたいだろうか。



# フレスコボールという 思いやりのスポーツ

窪島剣聖

(日本フレスコボール協会 会長)



「フレスコボール」というスポーツを皆様はご存知だろうか？ ビーチで羽子板のようなラケットを使うスポーツである。実はこのスポーツ、今年オリンピックが行われるリオデジャネイロ、コパカバーナビーチが発祥の地である。

ゲームの目的は、2人または3人でラリーをし、出来る限り長くボールを宙に浮かす事である。すなわち向かい合う相手は打ち負かすべき敵ではなく、味方である。常に味方の打ちやすい所へボールを打ち返すという技術はもちろんのこと、相手への「思いやり」が求められる。この点からフレスコボールは「思いやりのスポーツ」とも呼ばれている。

## フレスコボールの歴史

フレスコボールは第二次世界大戦後の1945年に、リオデジャネイロのコパカバーナビーチで発祥した。このビーチの近くに住んでいた建築家により考案されたスポーツである。元々は、彼がビーチでテニスをしていたところ、潮風や海水によりテニスラケットが痛んだ。そこで、近くの木工職人に依頼し、木製のラケットを製作したのである。ここからフレスコボールが始まった。

話は変わり、フレスコボールという名前の由来であるが、これは「夕涼み」から来ている。仕事終わりの夕方にビーチで行くことに知られているカリオカが、夕暮れ時にビーチで涼みながらプレーしていた事から来ている。「Frescobol」を漢字で表すと、夕涼球にでもなるだろうか。

50年代にはリオデジャネイロ全州へ、80年代にはブラジル全土へと拡大した。各地で大会が開催されるようになり、以

後競技者人口を伸ばしていった。その中でブラジル各地にフレスコボール協会や連盟が設立された。

2003年、その時代にフレスコボールの主要都市であったリオデジャネイロ、エスピリトサント、サンパウロの連盟員による会合が行われた。当時、地域によりバラバラであったルールへの認識を深めるためである。その結果、各組織の持つルールへの理解が深まり、各ルールが主観的なものから客観的なものへと高められた。

ブラジル全土のフレスコボールを束ねる協会であるブラジルフレスコボール協会が2013年に設立され、全国で統一したルールの下で大会が開催される事となった。現在ではブラジル全国でツアー大会も開催されるに到っている。

生誕70周年を迎えた2015年には、フレスコボールがリオデジャネイロ市の無形文化財へも登録された。リオオリンピックのマスコットキャラクターであるTomがSNSにてフレスコボールに関する記述もしている。この事例からフレスコボールがリオデジャネイロにおける1つの文化として認められていることが伺える。

## ブラジルとの交流状況

日本にフレスコボール協会が設立されたのは、2013年の夏である。2014年より本格的に普及活動を開始し、全国各地での体験会開催、三浦海岸での海の家「夏小屋」にてフレスコボール特設コート設置、多数のメディア出演、フレスコボール大会の開催などを行ってきた。

2015年3月には第1回フレスコボー

ル世界大会がメキシコ開催され、日本代表も参加した。ブラジル代表選手も多数参加しており、その中に日系ブラジル人、カミーラ・サクリ選手がいた。彼女はブラジル女子トップ選手の1人であり、世界大会でも女子のカテゴリーで優勝を果たしている。母親が日系人で、名古屋でブラジル料理屋を営んでいる。彼女と彼女のパートナーを、2015年の8月に三浦海岸で行った「フレスコボール ジャパンオープン2015」へと招待した。この大会は、「日ブラジル修好120周年記念事業」としても採択されたが、多くの人たちの協力もあって、ブラジルと日本の交流の場を設ける事が出来た。

現在も日本とブラジルとは定期的に連絡を取り合っており、今年の5月に行われるブラジル最高峰の大会「ブラジルオープン」にも日本からの参加枠を特別に設けられている。他の国は参加枠を設けられておらず、これも日本とブラジルの関係性が認められているからこそであろう。

## そして今後へ

現状フレスコボールは他の中南米各国を始め、アメリカやイタリア、スペインと欧米へも急速に広まりをみせている。その他ビーチで行うラケットスポーツ競技人口は700万人と推定されており、その中でもフレスコボールが一番勢いがある。オリンピックの正式種目を目指し、国際フレスコボール連盟の設立へ向けての動きもある。まさに日々成長中のスポーツである。思いやりのスポーツであるフレスコボール、今後にご注目いただきたい。

# 日系移民が普及させた ブラジルの卓球



桔梗忠彦

(三英取締役 国際戦略部長)

## 卓球は日系人が大活躍

ブラジルでは「卓球は日系移民が普及させた」と言われている。過去も現在も、ブラジル代表選手には、数多くの日系2世・3世の人たちが見られる。

著名な人を列記すれば――。●ウーゴ・オヤマ氏：ロンドンオリンピックまで、なんと連続6回オリンピックに出場。●マリアーニ・マユミ・ノナカ嬢：アテネオリンピック卓球女子ダブルスにブラジル史上最年少で、北京ではシングルスに出場。●グスターボ・ツボイ氏：北京・ロンドンと2大会連続出場。

ほかに、現役のジェシカ・ヤマダ嬢、ブルーナ・タカハシ嬢、カズオ・マツモト氏など日系の選手が活躍している。2015年3月時点で、ブラジル代表12名のうち8名が日系人選手となっている。リオ2016でも、地元開催の利を生かし、日系人選手はもちろん、ブラジル人選手の躍進も期待されている。

株式会社「三英」と聞いて、ピンと来る方のほとんどは卓球の現役競技者あるいは経験者ではないだろうか。1962年の創業以来、競技用卓球台を看板商品としているメーカーで、全日本卓球選手権をはじめ、ITTF(国際卓球連盟)主催の世界卓球選手権、91千葉、01大阪、09横浜、14東京、また92年のバルセロナオリンピックに卓球台を供給している。黒板のような深緑色の天板・地味なユニフォームから「暗いスポーツ=卓球」と揶揄された時代、現在は世界の主流になっている青色の天板を初めて世に出したメーカーでもある。ちなみに、「青色天板」の披露は91千葉大会だった。南北朝鮮が分断後初めて統一コリアチーム

として出場、女子団体では9連覇を狙った中国女子を破り優勝し、話題になった。

## ブラジルの卓球競技人口

スポーツの競技人口(実施人口=趣味、レジャーも含む)は、各国の競技団体への登録者数を見ると正確に把握できる。日本のJTTA(日本卓球協会)登録者数は320,915人(2014年度)となっており、軟式野球、サッカー、剣道、バスケ、バレーボールに次ぐ人数となっている。ブラジルはどうかというと、CBTM(ブラジル卓球協会)の話では、登録者数は25,000人とこの事である。日本の約1.5倍の人口を擁す大国ではあるが、こと卓球人口となると10分の1にも満たないというのが現状のようである。

ITTF(国際卓球連盟)が2015年3月に発表した国別チームランキングでは、ブラジル男子は25位(日本は3位)、女子が27位(日本は2位)となっている。サッカー、バスケットボール、バレーボール、テニスが国別ランキング上位に位置するのに対し、卓球は見劣りしているように見える。しかし、ITTFに加入する各国または地域の協会は217あり、世界的に見れば決して下位ではない。

## ブラジルとの関わり

三英はブラジル内で、2014年から卓球大会をサポートしている。ブラジル内の大会で使われている卓球台の多くが中国・インド製の廉価品であることを知り、オリンピックに向けたPRの一環として取り組んだ。しかしそれ以上に日系の人たちが努力し普及させた卓球、苦しい時

代の数少ない娯楽であった卓球を応援したいという気持ちが強かった。

15年にサポートした大会はLatin Cupを3回(3月Piracicaba)(9月Jundiai)(10月Salvador)、The San-Ei Brazilian Championshipを11月Salvadorの計4大会であった。特に、Brazilian Championshipは印象深く、約600人の選手が参加し、大会期間中はラテンらしく連日夜まで盛り上がった。

大会をサポートして感じた事は、会場が立派である事。参加者が元気いっぱいである事。応援が盛大である事。いかにもラテンの明るい大会といった印象を受けた。半面、改善が必要と感じたのは、卓球をするには照明が暗い事。会場の床が木製ではなくコンクリートのため合成ゴムのシートを敷いても弾力性が低く、選手の負担が大きい。時間配分に余裕が無いため、時間がだいぶ超過する事等である。

今後、三英がブラジル国内でいかに卓球台のプロモーションをしていくかは、現在 鋭意検討中である。

販売における一番の課題は製品輸入に係る大きな経費・関税による価格の上昇であり、これを回避するためには、ノックダウン状態での輸入またはブラジル国内での生産しかない。いずれにせよリオ・オリンピックを契機として、ブラジル国内の卓球普及・振興に役立つ活動をしていく計画である。



# 邦字紙の 存続意義を考える

堀江剛史

(ニッケイ新聞記者)



「また一人読者が減った」。私がブラジルで勤務する日刊邦字紙『ニッケイ新聞』（本社・サンパウロ市）で訃報記事を扱うたび、そう思う。続けて、一つの歴史が消えたとも。日本の真反対ブラジルで営まれてきた移住体験という「歴史」だ。

1908年に781人が乗り込んだ笠戸丸から始まった日本人移住。最近修正されたデータによれば、190万人の日系人がいる。もちろん世界最大の日系社会であり、ブラジルは世界有数の親日国でもある。

戦前・後に移住した人は24万人余。約6万人いる現在日本国籍者は、長くブラジルに住んでいるとはいえ、ポルトガル語が不如意で情報源を日本語新聞に頼らざるを得ない人が多い。購読者でないにしても多くの人が新聞を手にとってくれるのはありがたいことだ。立ち話などをしていて「あなたのコラムの一字署名は何?」「あのテーマは面白かったけど、こんな話もあるんだよ…」など記事の内容に関して直接感想や批判を頂くことも多い。読者との距離が近く自分が書いたものへの評価もよく分かる。待遇はさておき、やりがいのある仕事といえるのだが、読者層は高齢。購読者数の減少は著しく広告収入の影響も大きい。

戦後移住のピークだった1960年代初めに二十歳前後だったとすれば、平均年齢は75歳以上。読者減が懸念されている世界の有料紙メディアの超未来といえる。日本語は読めるが漢字の少々弱い、子供の頃に移住した準二世や、戦前に日本語教育を受けた二世読者のため、ルビを振るなどの垣根を低くする努力もしている。しかし、新たな読者層の開拓に繋がるわけはなく、自虐的にいえば気持ちばかりの「延命措置」といったところだろうか。

紙面は8ページで週5日発行。共同通信の配信による日本や世界の記事に加え、ブラジルの翻訳記事、読者文芸などに加え、特に力を入れているのは毎日2ページを組む日系社会面だ。よくもこれだけイベントやニュースがあるなど感心するのだが、個人的にも力を入れてきたのは移民の来歴だ。何故移住したのか、何を縁（よすが）に生きてきたか、大事に守ってきたものは。生涯を賭けて体得してきた日本人論を

拝聴するわけだ。

子や孫はすでにポルトガル語が主体になり、日頃コミュニケーションに隔靴搔痒の思いがあるのか、ひょっこり現れた我々“日本の日本人”に思いの丈を打ち明ける。「初めて（体験や思いを）話した」と言われることも多く、記者冥利に尽きる。

このような環境では時間軸が違う。「今度話を聞こうと思っていたのに」「先日まで元気だったのに」と、思わぬ訃報に接して肩を落とすこともしばしば。まさに移民取材は一期一会なのだ。自分史や日記でも書いていなければ、その体験や民族の知恵は、墓場に持っていかれてしまう。新聞がその発表の場となり、自然、取材は聞き書きのスタイルに繋がる。郵便状況が悪いなかで「速報性」よりも「記録」の重要性を強く感じるようになった。

2008年に迎えたブラジル日本移民100周年を機に、日本文化への関心も高まり、農業を中心に貢献した日本移民が顕彰された。日本人の歴史はブラジルの一部であり、その特性こそが認められている。以降、若い世代の心境に変化が起きているような気がする。

日本精神を固持しようとした一世、ブラジル社会に同化しようとしてアイデンティティに悩んだ二世。そして、現在の主流といえる三世らは、ごく自然にルーツに向き合うようになっている。「何故自分はブラジルにいるのか?」と。

次世代を含め、その疑問に答えるのも邦字新聞の使命と捉え、記事をポルトガル語に翻訳、書籍化する事業にここ数年力を入れている。移民世代の体験を知ること。それがひいては日系ブラジル人としての誇りに繋がると思いたい。そして、ブラジル社会にも知ってもらいたい。日本移民の足跡は、すなわち移民国家ブラジル建設の歴史でもあるのだ。

目を日本に転ずれば、少子化著しい将来、海外からの労働力に頼らざるを得ないといわれ、移民受け入れの議論が行われている。日本人が異文化のなかでどう適応してきたか。現在進行中の「民族的実験」の現場であるブラジル日系社会の歴史を書き残すことが、日本の多文化共生への道しるべとなるのでは—そんな思いもある。

# ブラジルでの新工場建設

重年生雄

(Fujikura Cabos do Brasil 社長)



Fujikura Cabos do Brasil (以下FCB)は2013年7月に設立し、2015年4月から架空電線の製造をスタートした新しい会社である。主な製品はOPGW(光ファイバを複合した架空地線)とACSR(電力搬送用の架空送電線)で、工場はリオグランデ・ド・スール州、モンテネグロ市の工業団地内にあり、ポルトアレグレ市の中心からは概ね車で40分程度の所にある。

工場建設に当たっては様々なロケーションを検討したが、以下の理由でモンテネグロ市を選択した。①リオグランデ・ド・スール州の民意が高く、比較的 안전한地域である事。②教育を受けた有能な人材を集めやすい事。③幹線道路に近く、交通のアクセスが良い事。また、リオグランデ・ド・スール州政府から熱心な誘致招聘を受けた事も工場建設地選定の大きな理由の一つに上げられる。

2013年秋から工場建設が始まったが、最初に悩まされたのは雨が多い事と、この土地特有の赤土の表土がぬかるみやすい事であった。一度雨が降ると、2~3日は地面のぬかるみのために車両がはいれず、工事が滞ってしまった。また、夏は気温が連日40℃を超え、まるで蒸し風呂のような暑さであった。工場の屋根と床のコンクリートが完成した時には、工事関係者一同ほっとしたものである。

建物完成後も、周囲の道路工事、消防設備の工事、製造設備の据え付け工事において、予期せぬトラブルが続き、予定より半年近くも遅れての工場完成に至った。その間、ブラジル特有の許認可の問題、役所との交渉の遅れも経験した。中でも環境に付いて、ブラジルには厳しい規制

があることがわかった。例えば枯れかかったイチジクの木がメイン道路の真ん中にあり通行の邪魔になるため、協力事業会社が切り倒したところ、ブラジルではイチジクは重要な木であり勝手に処理してはいけないという事で、罰金と15本のイチジクの苗木を植樹する事を言い渡された。

現在、工場は順調に稼働しているが、まだまだ新しい課題が出てきている。税金の複雑さ、労働問題等ブラジル特有の問題に加えて、税関のスト、トラックのストなど、自分たちの手ではどうしようもない課題も多い。先日も嵐で水位があがり、リオグランデ港が冠水して荷降ろしができないため、船がサントス港に停泊してしまい、輸入材の到着が1ヶ月以上遅れるというようなトラブルもあった。会社を設立してから2年過ぎた今も、信じられないような出来事が起こるが、最初の頃と比較すると精神的にタフになってきた。一方、リオグランデ・ド・スール州は、シュラスコ発祥の地であり、シマホン(マテ茶を飲むための道具)も有名で、独特かつ特徴的な文化があり独立心も旺盛である。またサッカーもGremioとInternacionalという国内きっての有力チームがあり、ブラジルの中では洗練された魅力的な州である。

足元の政治・経済環境は決してよくないが、大国ブラジルのマーケットの魅力は大きい。日系人160万人を有する親日国であり、人口2億人という巨大な国内市場を有し、豊富な食糧および天然資源がある。様々な構造的課題を抱えているが、ブラジルを『遅々として進む国』と捉え、中長期的視野で取組めば、必ず活路が見いだせると確信している。特に我々が手がける電力、通信のインフラ分野は中国、東南アジアの国々と比較しても、現状は十分とはいえず、今後の発展が期待できる。

実質的な創業からまだ1年にも満たないFCBであるが、優秀なブラジル人社員と志を抱いてブラジルにやってきた日本人社員が心を一つにして、ここブラジルの大地に根を張る事が出来る企業を目指して頑張っていきたいと考えている。電力、通信部門で日本のインフラ建設に貢献してきた企業として、そのノウハウを活かして今度はブラジルのインフラ建設に貢献したいというのが我々の願いである。



FCB工場の正面玄関

# ブラジル腐敗防止法に関する一考察



松田純一  
(弁護士。松田総合法律事務所社長)

連載  
ビジネス  
法務の肝

世界各国の腐敗や汚職を監視する NGO「トランスペアレンシー・インターナショナル」が発表する「腐敗認識指数」は、専門家やビジネス関係者らの認識する腐敗・汚職の度合いを示したもので、腐敗度が高い 0 点から、低い 100 点までの得点で示される。直近の発表（本稿執筆時）は 2014 年 12 月 3 日で、ブラジルは世界 175 カ国中、43 点で 69 位。

他の BRICs を見るとロシアは 27 点で 136 位、中国は 36 点で 100 位、インドは 38 点で 85 位となっている。急速な経済成長をしている国々では腐敗認識指数が悪化する傾向にあり、ブラジルは特段悪いとは言えない。（ちなみに、日本は 76 点、15 位）

しかしながら、2014 年後半、ブラジル国営石油公社ペトロプラスに絡む汚職事件が露見、この激震と経済的後退はブラジル政府の深刻な財政難の大きな原因となり、ルセフ大統領は極めて困難な舵取りが求められている。あるメディアによると、ペトロプラス汚職事件の損失規模は 180 億米ドル（2 兆 2,500 億円）、2014 年の GDP 1% に相当、GDP においては今後 1.7% の後退が懸念され、雇用への影響も甚大と予測されている。

## CCA の意義と留意点

2015 年 8 月開催の日本ブラジル国際シンポジウムのパネリスト、セルジオ・ミヤケ弁護士（南米ホンダ企業内弁護士、ブラジル日本比較法学会副会長）による正論を得た発言を引用させて頂く。「2013 年 8 月 1 日に制定された腐敗防止法（Clean Companies Act、以下 CCA）は、法人を含む（贈賄側になるであろう）民間人の処罰は様々な形で定められたが、不正関係の片側にいる公務員への追加制裁については何ら規定がなく、腐敗行為に関わる公人へ罰則を与える検討が不足している。しかしながら、企業のコーポレート・ガバナンスと社会的責任を語る時、「誠実性」は単に人々に期待される質という以上に、あらゆる国において、あらゆるビジネスの生き残りのために不可欠な要素となったという状況に我々は直面している」

なお、CCA の特徴として、筆者にて追記する。①国内外を問わず、ブラジルで事業を行うあらゆる法主体（企業）、支店または事業所に適用される。②ブラジル国内外の公務員に対する贈賄を禁止するが、英米の法律との

重要な相違として贈賄行為について刑事責任を課さない内容となっている。③遡及効はなく、2014 年 1 月 29 日以降の行為に適用される。④当局への協力に基づく罰金の軽減措置及び「実効性のある」企業内コンプライアンス手続きは定めているが、手続きの「評価基準」は確立されていない。

## 我が国企業の対応方針

前述の通り、CCA には改善すべき点も見受けられるが、腐敗防止と取締りに取り組むブラジル政府の意思を象徴する法律として意義は大きい。

日本とブラジルは相互に重要なパートナーかつ取引先である。ブラジルに投資する我が国企業は、経済犯罪に関する法制の整備・強化といった変化を理解する一方、グローバルなコンプライアンス・プログラムを支店・事務所等にて実施する必要がある。ブラジル上場企業では経営の質の向上が求められているため、経営トップがグループ経営方針を明確に示した上で、如何に実践しているかにつき留意しなければならない。投資・買収の場合には、対象会社における腐敗行為関連リスクの潜在有無の検討が肝要であり、デューデリジェンスの重要性は、前回の寄稿で述べたとおりである。

## 継続した改革が持続的成長に不可欠

トランスペアレンシー・インターナショナルが世界銀行のデータを参考にしたところ、腐敗指数が 2% 上昇すると、経済成長は 2%、投資は 4% 減少するとの試算がなされた。

即ち、企業や国家の「持続的な成長」のためには、個人・企業を問わず、倫理に基づく高潔さが欠かせない。ブラジルのみならず、世界各国において「形式」ではなく「実質」として機能する真のコーポレート・ガバナンス、コンプライアンスの実現が望まれる。

シンガポールはアジアで最も腐敗度が低いものの（84 点、7 位）、政府は汚職撲滅に向けて汚職防止法を改正し、汚職防止局の人員増強、汚職関連通報を迅速に処理する施設設置等の対策を講じている。こうした継続した改革が持続的な成長の条件として不可欠と言えよう。

# ブラジルの国家輸出振興計画 (PNE) とは

過去 4 回の連載において、輸入に関する間接税制度が極めて複雑であることから生じる「ブラジルコスト」と呼ばれる高コスト構造を始めとした、ブラジル進出企業が遭遇するビジネス障壁の紹介とその対策としての特別関税制度の活用、南米南部共同市場（メルコスール）での優れたビジネスチャンス、そして特別関税制度を活用したコマツのコスト削減事例を紹介した。今回は、15 年 6 月にブラジル政府が発表した国家輸出振興計画（PNE）について説明する。

## 市場のリスクと輸出の現状

輸出は、製造会社が自社製品の販売を現地市場にのみ依存するのではなく、市場の多様化を図ることを可能にする。企業が専ら自国市場での販売に固執する場合、その国の経済情勢の虜になってしまう。その市場において業績に影響を及ぼす何らかの悪要因が発生した場合、企業は少なくとも短期間では対応することができず、大きな損失を被る危険性に晒される。この依存関係は、組織に対する財政面での大きなインパクトに加え、特に販売・生産・投入資本の計画策定に関する苦難や従業員と取引先の数および研修の変動頻度を増大させる傾向がある。結局のところ、単一市場の不安定さが必然的に企業に直接反映することになる。

そのため、市場での存在の強化または存続を望む企業は、その規模が大、中、小のいずれであれ、国際市場を指向する特別な努力を自らの計画の中に含まなければならない。

正にそれこそがブラジルで起こっている状況であり、企業と政府がより進んだ輸出の自由化を促進し、それにより市場の多様化、生産の増大、収益の拡大、租税負担の軽減、企業の業務改善、製品品質の恒常的改善といった成果を得ることにより一層の開放を目指している。

今日ブラジルは世界第 7 位の経済規模を有しているが、輸出に関しては 25 位にとどまり、世界の全輸出量の 1.2% を占めるに過ぎない。この数字はブラジルの潜在的な可能性からほど遠いものである。

## 5 つの支柱から成る PNE

ブラジル政府は、停滞する経済状況からの脱出並びに新経済班の財政再建策の導入による公共投資縮小などの停滞ムー



エドアルド・ヴィトール  
(トムソン・ロイター GTM サービスグローバルヘッド)



フェルナンド・マグリ  
(トムソン・ロイター GTM サービスブラジルスマネージャー)

ドを一新し、海外市場へ向かうための自由化政策をより強化するため、15 年 6 月 24 日に、ブラジルに存在する企業に対する支援を主な目的とした国家輸出振興計画（PNE）を発表した。当計画は次の 5 つの支柱から成る。

- 1. 市場アクセス:** 市場の拡大、貿易障壁の撤廃および関税項目と非関税項目に関する二国間、地域内および多国間の貿易協定へのより広範な参加に焦点を当てた政策の立案。
- 2. 貿易拡大:** ブラジル製品に対する 32 の優先的市場のマッピングによる、製品の需要と供給を踏まえた市場を特定。これら市場は、世界の全 GDP の 74%、世界の全人口の 60%、世界の全輸入の 62%、世界の全輸出の 63% を占める。今後 4 年間のビジネスチャンスが 5,920 億米ドルに達すると予想される巨大な領域である。これらのビジネスチャンスは、食品、飲料、住居、建設、機械、器具、モード、化粧品、各種サービス等、ブラジル経済の多様な分野を網羅している。管轄官庁が進めるすべての活動は、当市場の開放、強化、維持および回復に焦点を当てたものとなる。
- 3. 貿易促進:** コストダウンと納期短縮を目的とした、行政手続きと税関手続きの非官僚化、簡素化、合理化および改善。
- 4. 輸出に対する融資と保証:** 既存の輸出に対する融資制度の改善による、輸出に対する融資を必要とする企業の支援。
- 5. 輸出促進のための税制の改善:** 政府は、Drawback（税還付。予定のもしくはすでに実施された輸出に対する見返りとしての課税停止または免税）、RECOF（特定産業向け保税倉庫に関する特別関税制度）といった輸出に関連する特別制度の簡素化を進める。輸出業者は、製品輸出時に特別制度の下で輸入したすべての資財に関わる連邦税を免除され、また当制度の下で取得し現地販売用の製品に使用した資財に関わる租税の納付に際し法定賦課金の適用を免除される。

ブラジルの企業は、単に輸出を一時的な販売チャンスとしてではなく事業戦略として見ている。つまり、国家が望み必要としていることは、貿易収支の黒字をより安定的に確保し、新規投資を取り込み、単なる製品の輸出国ではなく、国内で製造した製品を介してのテクノロジーの輸出国となることである。

以上、PNE をその背景も含め理解する事が進出企業にとっても税務も含めた成功への重要な視点となるのがお分かりいただけるだろう。

# “プロタゴニズモ”～ブラジルのエイズ当事者運動から学ぶこと



下郷さとみ  
(フリーライター)

12月1日は「世界エイズデー」。わたしは毎年この時期に合わせてブラジルから HIV 陽性者運動のリーダーを招いて、日本各地で講演会を実施してきた。2015年も6都府県12か所をめぐるってきたばかりだ。

この時期、なぜブラジルから？ そのこたえは、実はブラジルが「世界で最もエイズ対策が進んだ国」として国際社会から高い評価を得ているからである。ブラジルでは1996年にエイズ治療が無料化され、また、積極的な予防啓発や HIV 陽性者の人権を守る取り組みが高い成果を上げてきた。これは、HIV 陽性者たちが「いのちの権利」を求めて世論や政府を動かしてきた運動がかちとったものにほかならない。

日本は先進国のなかでも唯一、HIV の感染拡大が続いている国だ。これは効果のある予防政策が十分にとられていないことの表れであり、HIV 陽性者への偏見や差別も社会に根強く残っている。また、予防啓発の場面では性についてオープンに語りあうこと、正しい知識を得ることが欠かれないが、日本では風俗産業やポルノ的表現がそこそこ目につく形であふれている反面、性教育へのタブー視がとも強いという矛盾した状況がある。

ブラジルの進んだエイズ対策と、それを突き動かしてきた HIV 陽性者たちの力強い運動から日本のわたしたちが学べることはあるはず—そんな思いから、この講演事業を続けてきた。

毎年日本に招聘しているのは、ジョゼ・アラウージョ・リマ・フィーリョ氏。サンパウロ市郊外の貧困地域で陽性者支援や青少年を対象にした予防啓発活動を行う NGO の代表を務めるとともに、保健省の諮問機関である国家エイズ委員会委員やサンパウロ市保健局のエイズ政策審議会委員として政策提言を行ってきた人物である。

30年前、28歳の時に HIV に感染し、薬のない時代を生き抜いて、いまも元気に活動を続けるアラウージョ氏は、いわばエイズという病をめぐる社会の歴史の生き証人だ。彼の語る HIV 陽性者運動の歴史と今から、「プロタゴニズモ」の力強さが伝わってくる。

プロタゴニズモとは、ブラジルの社会運動の現場でよく耳にする言葉である。旧来のアシステンシャルイズム（慈善

運動）とは違って、社会に存在する問題や課題の当事者自身が運動の主人公（プロタゴニスタ）として主体的に運動をつくりあげていくありかたをいう。日本にはまだまだ不足する部分であり、たとえば、アラウージョ氏がいつも講演で語る「憲法は使うもの」という言葉は、わたしにとつては、ある意味、目から鱗が落ちるものだった。

ひとつのエピソードを紹介しよう。

1996年のはじめ、当時アラウージョ氏が代表を務めていた HIV 陽性者団体のメンバーの女性がエイズを発症して危篤状態に陥った。彼女の命を救うために仲間たちが知恵を絞って思いついたのが「憲法196条を使おう」というアイデアだった。

憲法196条は「健康はすべての人の権利であり、それを保障するのは国家の義務である」と定めている。政府には、彼女の命を保障する義務があるはず。当時、アメリカで発表されたばかりだった画期的なエイズ治療の新薬を政府は取り寄せて無料で彼女に提供せよ。

このような訴訟を政府に対して起こしたのであった。

すみやかに、「憲法を遵守するのは政府の当然の義務である」とする原告勝訴の判決が出た。三権分立が厳格なブラジルらしい司法判断だった。そして同様の訴訟運動を全国で数百件も起こし、すべて勝訴を勝ち取った。その結果、政府が動き、同年10月に、無料の公的医療制度にエイズ治療を組み込むという法律が定められたのだった。

HIV 陽性者運動の成功を見た他のさまざまな疾病の患者団体が、続々と同様の運動を起こしていった。こんにちブラジルでは、臓器移植などの高額治療も含めた医療がすべての人（不法滞在の外国人さえも）に対して無料で保障されている。こうして HIV 陽性者の運動が公的医療制度の拡充の端緒をひらいたのであった。

わたしは長年、リオデジャネイロのファベラの住民運動にもかかわってきたが、そこでも常にプロタゴニズモの力強さに触れてきた。社会保障、貧困、教育、平和……どこの国のどんな場面の問題であれ、社会を良くするための動きにプロタゴニズモは欠かせない。日本の社会の足元を見つめつつ、エネルギーに動くブラジルの市民社会からたくさんを学び続けたい。



Nanami (ボサノヴァ歌手)

## レコーディングで訪れたリオにて

私のファースト CD 制作にあたり、今年4月中旬リオデジャネイロでレコーディングをする機会に恵まれた。リオは二度目の訪問となる。ボサノヴァとは、新しい傾向という意味の言葉だが、図らずもボサノヴァ女性パワーを再認識させられた。

連日スタジオに籠もりっきりで収録のストレスもピークに達した休日、音楽プロデューサーの吉田和雄氏があるライブにドラマーとしてゲスト出演することになり、急遽私も1曲歌わせていただけることになった。場所は、コパカバーナ地区のボサノヴァ発祥の地ベコ・ダス・ガハーファス(小瓶横丁)にある「Bottle's Bar」。1950年代末から60年代のボサノヴァ黄金期に毎夜盛り上がっていた伝説の店だ。トム・ジョビン、セルジオ・メンデス、カルロス・リラ、ヴィニシウス・デ・モラエスらに交じって、敬愛するボサノヴァのミュージシャン、ナラ・レオンや国民的歌手と言われたエリス・レジーナも常連だった。

客席を見渡すとリラックスした素敵なムードだ。女性客も多い。挨拶を交し合い楽しげにハグしたり正に大人の社

交場だ。ショーが始まるとそれぞれに歌を口ずみだした。ステージと客席が一体となり、皆音楽が大好きで心から楽しんでいるという雰囲気に包まれ幸せな気分だった。気がついた事は女性が元気過ぎるということだった。女性歌手は凄いパワーで歌い続け、キーボードの女性は終いには立ち上がって演奏していた。

レコーディング最終日、お世話になったコーディネーターのタチアナ嬢が自宅に招いてくれた。彼女の心づくしの手料理だ。近くに住む母親や妹夫婦、子供達も次々と集まって来た。亡くなったお父さんのコレクションだったという LP の数々を聞きながらビールを飲んでサンバを踊った。音楽は国境や世代を超えて人と人を結びつける。ブラジル人にとって音楽は一家団欒にも不可欠であることを思い知らされた。

それにしてもボサノヴァを含むブラジル音楽は女性パワーなしには存在しえない。幾つになっても女性の魅力を振り撒いて歌ったり踊ったりするパワーは圧巻だ。母なる大地ブラジルの所以だ。

### ジャーナリストの旅路

## ブラジルで広がる日本のB級グルメ

中島 昇

(NHK報道局国際部副部長、ニュースデスク)

スシ、テンプラ、ヤキソバ。いまやブラジルでは珍しくない日本食の数々。サンパウロでの日本食レストランの数は、シュハスカリアを抜いて、各国レストランの中でも1位と言われるほど一般的に。これも、100年を超える移民の歴史のなかで、いろいろと和食を作ってきた日系人の努力があったのはいうまでもない。

こうしたブラジルの日本食で、最近、注目されているのが、B級グルメ。うどんやお好み焼き、クレープ、たこ焼きなどといった庶民の味を提供するレストランが目立ってきている。店の担い手になっているのが、日本に出稼ぎをしていた日系人たち。その草分けとも言えるのが、サンパウロ・リベルダージに店を構える日本式クレープ屋「ハチ」。日本で3年間働いた経験を持つ日系3世の石川ミリアンさんは、渋谷や原宿に出かけたさいに、食べたクレープの味を忘れられず、ブラジルに持ち込みたいと思ったことがきっかけで店を始めた。店名も渋谷駅前のハチ公像からとっている。ブラジルにはない

フルーツやアイスクリームなどはさんだクレープが売りで、中には、いちごとあんこにもち、生クリームを入れた「いちご大福クレープ」といったユニークなものも。

また、リベルダージに15年6月にオープンした手打ちうどんの専門店「メウ・ウドン」の店主の水本良夫さんも日本帰り。10歳の時に両親と日本に移住し、東京の企業で営業の仕事をしてきたが、14年、帰伯。「ブラジルにない日本の味を知ってもらいたい」とはじめた手打ちうどんだが、開店までは試行錯誤。そもそもブラジルの小麦にはとうもろこしなどが含まれているため、日本のようなこしが出せない。しかし、日本から小麦を取り寄せては採算があわない。その難題をアメリカ産の小麦粉をブレンドさせることで解決させ、いまでは行列ができる人気店に。夢は手打ちうどんをブラジル人に一般的な食べ物として知ってもらうことと壮大だ。

慣れ親しんだ庶民の味をブラジルにという日系人の思いが、ブラジルの和食文化の幅を広めはじめています。

# フィールズ賞受賞の アヴィラ博士と 数学研究のメッカIMPA

岸和田仁（「ブラジル特報」編集人）



アヴィラ博士（左）とジョー・ソアレス（右）  
© gshow.globo.com

リオデジャネイロ市。ボサノヴァのリオにして、オリンピック・パラリンピックのリオ。そして麻薬マフィアが暗躍し警察との銃撃戦が絶えないリオ。そんなリオの代表的な観光名所、植物園に隣接するのが、高等数学研究センターとして世界的に知られる IMPA(国立純粋・応用数学研究所)だ。超有名な研究所といっても、知られているのは数学関係者の間に限定され、一般的な認知度となると海外どころかブラジルにおいても減法低いといわざるをえない。例えば、研究レベルの高さで知られる EMBRAPA(農牧研究公社)や ITA(航空技術学院)の知名度に比べれば、ほとんど無名に近かった。そんな数学研究センターが、ようやく最近になって注目を集めるようになってきている。

それは何よりも、IMPA とフランスの CNRS(国立科学研究センター)の両方でリサーチャーとして働く、若き天才数学者アルトゥール・アヴィラ博士のおかげだろう。Tシャツか皮ジャンがお似合いの36歳の“アンチャン”(失礼!)と呼びそうになってしまう、ひげ面の「数学界のネイマール」が、数学のノーベル賞に相当するフィールズ賞を昨年受賞したからだ。受賞対象となった業績は、「カオス・力学系理論のユビキタス問題」を解決した、というものだ。(むろん、筆者には、何のことが全く理解できていないが)

ちなみに、4年毎に発表される、この数学界最高峰のフィールズ賞を日本人で受賞したのは、小平邦彦、広中平祐、森重文の三名であるが、アヴィラ博士は、ブラジル人として初めて、ラテンアメリカ出身者としても初めてだ。もっとも彼はフランス国籍も有する二重国籍者なので、フランス政府は、フランス人で13人目のフィールズ賞受賞者と“ちゃっかり”いや、しっかり宣伝しているが。

リオの中産階層家庭で育ったアルトゥールは、中学時代から数学教師を質問攻めにした由だが、16歳で IMPA に入学、21歳で博士号を授与され、奨学金を得てパリに留学、といった経緯を経て、2001年より、パリとリオを数か月ごとに行き来する生活を続けている。大数学者ポアンカレを尊敬する、この天才肌の数学者は、研究の間には、スポーツジムに通ったり、レプロ

ンのジュースバーでアサイを愛飲したり、と普通の若者と変わらない生活ぶりだが、自分の専門分野については、「数学に関する本も論文もあまり読まない、研究仲間との議論のほうが数学研究に役立つ」と、発言している。

公的な場に出ることが好きではなく、「自分のスケジュール管理がずさんで、忘れてしまった」から、ハーヴァードやプリンストンでの招聘講演会もすっぱかしてしまったり、「自分の研究室はベッドの上だ」とか「パリ生活は14年目となるが、博物館など興味なし。ルーブルにも行ったことなし」、あるいは「ブラジル人は、数学は嫌いだ、とかいってフィールズ賞のことも何もわかっていない。受賞をきっかけにブラジル政府も基礎科学研究の重要性を理解してくれるかと思ったら、ブラジリアで起きている問題があまりにも多すぎて、そうした研究や教育について考察するヒマもないようだ」とか、いささか“問題発言”も多いため、既得権益に安住した象牙の塔の住人(大学教員・研究者)たちからも、“生意気な若造”扱いされてきたことも事実だ。出る杭は打たれる、のはどこの世界でも共通だ。

そんな彼を受容し育てたのが、1952年創立の IMPA という“非ブラジルの”にコスモポリタンな研究センターである。現在、研究や調査スタッフ(教授やリサーチャー)が50名、修士課程・博士課程・ポスドクの学生数約150名という陣容だが、毎年公刊される数学論文の数と質では、アメリカ数学協会によれば、スタンフォードやプリンストンと比べても遜色のないレベルの由だ。教える側も学ぶ側も、国籍は、フランス、ロシア、イラン、パラグアイなどと世界中から集まっており、現在の所長セザル・カマシヨ(カマチヨだが、ポ語ではカマシヨ)は、カリフォルニア大学で博士号を取得したペルー人数学者である。

日本でも議論されている世界大学ランキングで、サンパウロ大学は100位内に入れず(2015年は101位)、改めてブラジルにおける高等教育の質が問われているが、例外的存在として注目を浴びているのが、IMPA というわけである。リオには、こんな知性のメッカが60年以上も存続している、とブラジル人が再発見しているのだ。

## ルセフ大統領弾劾審議

12月2日、クニャ下院議長はルセフ大統領の弾劾請求受け入れを決定した。このため、全政党代表によって構成される特別委員会が設置され、弾劾の正当性についての議論を経て委員会意見書が提出されることとなる。その後下院並びに上院にて審議されるが、罷免されるには、両院で3分の2以上の賛成が必要だ。

ペトロブラス(石油公社)贈収賄事件に関与しているクニャ議長は、下院倫理委員会において議員資格はく奪を巡って追及を受けているだけに、その報復的行為といえる弾劾請求容認がブラジル政治の混迷を一層深化させるとみられている。

12月6日付けジョルナル・ド・ブラジル紙(電子版)はじめ主要紙は、与野党の力関係から罷免となる可能性は低いと報道しているが、この政治混迷が経済低迷に更なる一撃となると懸念されている。

## 「ジルマはブラジル外交に損害を与えた」

12月2日付けフォリャ・デ・サンパウロ紙は、アレシャンドレ・ヴィダル・ポルト同紙コラムニストによる、ルセフ大統領訪日キャンセルを強烈に批判する論説を掲載した。(編集部注:ポルト氏は、コラムニストにして作家だが、本業は2014年まで駐日公使として東京で勤務した知日派外交官である。)要旨は、次の通り。

外交的能力を著しく欠くルセフ大統領が、またまたブラジル外交に甚大な損害を与えた。日本とベトナム訪問を直前にキャンセルしたことだ。大統領府補佐官は、「国家的な問題のため」と言い訳をしたが、この「国家的な問題」とは、ペトロブラス贈収賄スキャンダル問題でもミナス州における歴史的な環境汚染事故でもない。2015年度予算執行ができないという内政問題のことを指す。これで外交的に説明が通るはずもない。

特筆すべきは、これは二回目だ、ということだ。一回目は、2013年でこの時も出発の数日前にキャンセルした。また先月は、地球の反対側から来伯された秋篠宮殿下を20分以上も待たせた。日本ではよく知られたことだが、直前に予定を変更して(客人を)待たせるほど失礼なことではない。ルセフ大統領は、そんな失礼なことを二度も立て続けにやった。

日本は世界で三番目の経済大国であり、科学技術の先

進国にして大投資国であるが、何よりも120年もの長い外交・人的関係を有する友好国である。ルセフ氏は友好関係を好まないようだが、ブラジルは友好関係が好きだし必要だ。

大統領訪問には数か月もの準備期間が必要で両国の関係者がその準備作業に尽力し、少なからぬ経費もかかる。日本政府は日本国民に対しキャンセルされた訪問に係わる出費を説明する義務がある。そんなことに馬耳東風のルセフ政権は、誰をも満足させないからこそ、あんなに簡単にキャンセルできるのだろう。

## 第三四半期 GDP4.5% 減少

12月1日のIBGE(地理統計院)発表によれば、7~9月期のGDPは、前年同期比でマイナス4.5%となった。サービス及び家庭消費の減少が大きいが、落ち込みが激しかったのは、投資(固定資本形成)であり、官民合わせ前年同期比マイナス15%となった。

## オリンピック開催によるブラジル査証の免除

10月25日付、コヘイオ・ブラジリエンセ紙は、オリンピック開催によるブラジル国査証の免除措置について報じている。概要以下のとおり。

1. ルセフ大統領は、来年開催されるリオデジャネイロ・オリンピックを訪れる旅行者及び選手の入国を簡易化させるため、2016年6月から9月の4ヶ月間、外国人に対する査証免除措置を決定した。
2. パリ及びマリにおけるテロ事件後、各国は警備体制を強化しているところであり、ブラジル政府内では反対の声もあるが、大統領は本措置が警備体制に影響するものではないと考えている。また、査証免除措置による移民流入の審査及び管理につき懸念されているが、ブラジル国政府としては本措置を米国、カナダ、日本、オーストラリア、中国からの旅行者に焦点を当てている。
3. 本措置は、ブラジル国外務省、法務省及び観光省が担当機関となり、規定に基づく特定の国に対し一方的な査証免除を決定することとなるが、対象国はまだ確定されていない。
4. 2016年9月18日(パラリンピック競技最終日)までに到着した当該旅行者は、ブラジル国内への入国日より90日までの滞在が認められるが、滞在期間の延長は出来ない。

## 新刊書紹介



### ◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

#### 『プログレッシブ ポルトガル語辞典』 (市之瀬毅、林田雅至ほか編集)

1990年署名の「ポルトガル語正書法協定」に基づく新正書法を採用した、初級者・中級者向けの学習ポルトガル語辞典。和和は見出し語数2万2千語、和ポ小辞典は8千語を収録。基本的な経済用語も載っており、頻繁に使う類語（例えば preto と negro）の違いを簡潔に記述したコラムなど、学習者向けの工夫もあり、学生ばかりでなくブラジルやポルトガルの駐在員など実用者にも便利な辞典に仕上がっている。

(小学館/2015年11月/1145頁/4,700円+税)

#### 『K. 消えた娘を追って』 (ベルナルド・クシンスキー著、 小高利根子訳)

1970年代前半は軍政時代で人権弾圧が一番ひどかった時期だ。そんなカフカの不条理に巻き込まれたユダヤ系ポーランド人

世。娘は、サンパウロ大学化学部講師だが、反政府左翼活動にコミットしたため、当局に拉致され秘密裏に殺害されてしまう。その消えた娘を必死で探す父親を主人公とする、ノンフィクションに限りなく近いフィクションだ。カフカの『審判』を想起させる秀作である。訳文はこなれていて読みやすい。

(花伝社/2015年10月/234頁/1,700円+税)

#### 『最新 海外市場 ビジュアルデータブック』

ASEAN/アフリカ/中南米の新興国市場全般をビジュアルでわかりやすく図解した、大人用「経済絵本」。中南米市場については、「日系人の数が多い」「消費市場の規模が大きい」「今後の成長余力が大きい」「中間所得層が拡大している」「女性の購買力が高まっている」「富裕層が成長」「サプライチェーン確立の機が熟しつつある」「日系企業の成功例」「経済成長に勢い」「産業構造が日本と補完関係」と企業進出を誘っている。

(ディスカバー・トゥエンティワン/2015年10月/160頁/1,800円+税)

#### 『インディオの気まぐれな魂』 (エドゥアルド・V・デ・カストロ著、 近藤宏・里見龍樹訳)

ポスト構造主義人類学の旗手として世界中の人類学界から注目を浴びているカストロ教授の先住民研究論稿集である。ブラジルの人類学最新動向を知るには便利な一冊だが、なんとも難解な哲学的論文がいくつも取められている。「トゥピ=グアラニーの宇宙論の包括的モデルの構築」を目指すカストロ教授は、ジルベルト・フレレイを人種主義者として切り捨て、インディオ性の基準を批判し、インディオ対象化を問い直している。

(水声社/2015年11月/214頁/2,500円+税)

#### 『ヨーロッパ近代文明の曙 描かれたオランダ黄金世紀』 (樺山紘一著)

西洋史研究の碩学が、オランダの黄金世紀=17世紀がもたらした写実的絵画群を歴史学的視点から解説していく、歴史エッセイ集だ。「第5章 異境の目撃 南アメリカからの贈物」は、当時オランダが占領していたブラジル・ノルデスチを描いた、フランツ・ポストの風景画やエクハウトの民族図誌を「歴史探偵」の如く読み解いていく、なんともスリリングな章であり、ブラジル史に関心を有する者にもお勧めだ。

(京都大学学術出版会/2015年6月/324頁/2,400円+税)

## !!「びっくり豆知識」!!

### ブラジルは難民では「おもてなし」の国?

さながらトランプ遊びのパバ抜きのようなものである。内戦が続くシリアなどから40万人とも言われる難民が欧州に押し寄せている。最終目的地はドイツや北欧だが、そこに辿り着く前にギリシャ、ハンガリーなどで足留めを食う人も多い。海が荒れば密航船が転覆するような事故も絶えない。

欧州の富裕国ドイツ、フランスなどは難民受け入れに積極的だが、ハンガリー、チェコ、ポーランドなど中東欧諸国は経済的余裕がなく、警戒的だ。15年9月にEU(欧州連合)は16万人の難民の各国別割り当て計画を発表し、難民対策は進むかに見えた。しかし、この「受け入れ義務化案」を吹っ飛ばしたのが11月にパリで発生した同時乱射テロだ。

IS(イスラム国)のテロリストが難民に交じって欧州に密入国していることがわかったからだ。怒ったのが欧州各国とアメリカ。「難民救済より国民の命」とばかり受け入れに慎重になり始めた。難民がパバ抜きのジョーカーになってきた。

そんな時、「移民の国」ブラジルが表舞台に登場した。ブラジルが受け入れたシリア難民は内戦発後2077人で、以下アンゴラ1480人、コロンビア1093人となっている。難民全体の25%はシリアだという(ブラジル誌調査)。2013年にブラジルがシリア難民に対するビザ発給条件を緩和したことも寄与している。

欧州委員会によると、欧州のラテン諸国ではスペインが1335人、イタリア1005人のシリア難民を入れているが、ブラジルの方がはるかに多い。ブラジルはとくに難民対応には熱心で、2010年のハイチ地震の後、4万人を超す難民を引き受けた。余りに数が多いので、国内労働者との間で雇用のトラブルも起きている。BRICSの中で、最も経済状況の悪いのがブラジルだ。しかしそれとこれとは別、と割り切れる懐の深さがあるのだろう。

中南米ではベネズエラ、アルゼンチン、チリ、ウルグアイなどもシリア難民対策に乗り出している。今後は欧州から弾き飛ばされた難民が中南米に相当数流れてきそうだ。

1951年制定の「難民条約」では「政治的意見を理由に迫害を受ける恐れがある」場合に難民認定する、と定義されている。これが「政治難民」で、貧困や求職のための「経済難民」は正式には難民とは呼ばない。これを杓子定規に守っているのが日本。柔軟に解釈して難民認定するのがブラジルだ。

もとより日本は難民についてはモノを申す資格はない。2014年の難民認定申請数5500人のうち、認定したのはわずか11件。日本の島国根性、外国人拒否反応も相当なものだ。「おもてなし」の精神はブラジルに寄贈したほうがよさそうだ。(W)



## 協会イベントのご案内

お申し込みは、協会ホームページのお申し込みフォームより、お願いします。

### ▶ 梅田 駐ブラジル日本国特命大使講演会

2014年より駐ブラジル日本国特命全権大使として活躍されている梅田邦夫大使をお招きして、「ブラジルの現状と課題(仮題)」について講演頂く。ブラジル政治・経済情勢は混迷の度合いを深めており、梅田大使の講演は非常に興味深いものになるはずである。

日時：2016年1月25日(月) 16:30~18:00

場所：フォーリン・プレスセンター 会見室

住所：千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル6階  
アクセス：東京メトロ千代田線・丸の内線・日比谷線「霞ヶ関」駅、都営地下鉄三田線「内幸町」駅

### ▶ 第一回 Salão de Música Brasileira

~ ブラジルクラシック音楽のきらめき ~

初めての協会主催  
音楽イベント

出演者：徳江陽子(ピアノ)、田中陽子(ソプラノ)、宮本アンリ(ピアノ)、加藤陽子(チェロ)  
ブラジルの音楽と言えば、サンバやボサノバのイメージが強いが、実は500年にわたる「クラシック」音楽の歴史がある。2016年はブラジルオリンピックイヤーでもあり、この機会に多くの皆様にブラジルクラシックを知って頂きたく、ブラジルクラシック音楽コンサートを企画した。

日時：2016年3月4日(金) 18:30開演(18:00開場)

懇親会パーティー19:50~

場所：南麻布セントレホール

住所：東京都港区南麻布4-12-25 南麻布セントレ3F  
アクセス：東京メトロ日比谷線「広尾駅」1番出口より徒歩6分

「ブラジル特報」は、一部有名書店の店頭でも入手できます。

日本ブラジル中央協会

## 冬期ポルトガル語講座 受講者受付中!

初心者~上級者まで、レベルに合わせて、6クラスをご用意しております。

これからポルトガル語を学びたいとお考えの方、覚えたポルトガル語を生かし、スキルアップをしたいとお考えの方、是非、ご参加ください。

講座のお申し込み・詳細については、協会ホームページをご覧ください。

— 皆様のご入会を、心よりお待ちしております —

法人・個人

## 新規会員募集中

会員数 2015年12月現在  
法人会員 約115社  
個人会員 約265名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に、是非会員となることをご検討いただければ幸いです。

【会員特典】 協会会報「ブラジル特報」の無料配布、会員価格にてイベント(講演会、ポルトガル語講座等)、会員交流懇親会に参加できます。

年会費

入会金は不要です

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円  
(2口以上) 以上 (1口以上) 以上

お申込みは  
こちらから

《日本ブラジル中央協会公式HP》

<http://www.nipo-brasil.org>

日本ブラジル中央協会

検索

## BRASILICAGRILL

CHURRASCARIA

ブラジル バーベキュー食べ放題  
+ ビュッフェ

¥5,400 (税抜き/tax not incl.)

ALL YOU CAN EAT 食べ放題

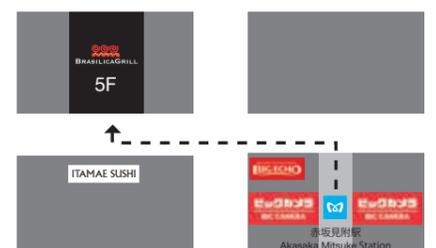
予約:  
[www.brasilicagrill.com](http://www.brasilicagrill.com)

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-4 赤坂月世界ビル5階  
Tokyo-to Minato-ku Akasaka 3-10-4 Akasaka Getsu Sekai Bldg. 5F

赤坂見附駅  
徒歩2分

赤坂駅  
徒歩6分

永田町駅  
徒歩6分



溜池山王方面 Tameike Sannou 赤坂見附駅 10番出口 Akasaka Mitsuke EXIT 10 銀座線 丸の内線 青山一丁目方面 Aoyama Ichome Ginza Line Marunouchi Line



スペイン・中南米との架け橋として20年  
**スペイン語・ポルトガル語の イスパニカ**

www.hispanica.org

ことばを学ぶ人にも、ビジネスマンにも、高品質で充実のサービスを提供いたします

**通訳 翻訳**

ビジネスから文芸まで経験豊富なプロがクオリティの高いサービスを提供

取扱い言語: スペイン語・ポルトガル語  
 英語・フランス語・ドイツ語  
 イタリア語・ポーランド語

**語学スクール**

初心者はもちろん、中・上級者向けコースも充実の溜池山王教室

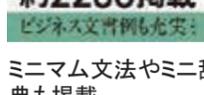
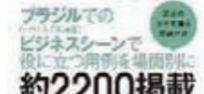
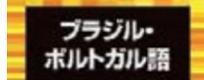
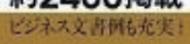
[www.hispanica-academia.org](http://www.hispanica-academia.org)

・通学  
 ・通信添削  
 ・オンライン ※ポルトガル語は通学のみ

**書籍の執筆・編集**

赴任、出張にはこれ!

安心のカナ発音  
 英語付き。



**中南米の情報提供**

スペイン通信社EFEの情報をもとに  
 中南米の最新ニュースを日本語で

・中南米経済速報 (週刊)  
 ・政治・治安情報 “CRONICA”  
 (月～金の毎日)

**企業語学研修**

ニーズに合わせた効果的な研修

粒ぞろいの講師が、ビジネスを成功に  
 導く語学力習得をとことんサポート。実  
 践的なコミュニケーション力を最大限ひ  
 きだすレッスンをアレンジします。

(有)イスパニカ 〒107-0052 東京都港区赤坂 2-2-19 アドレスビル1F (銀座線・南北線「溜池山王」駅8番出口前)  
 Tel.03-5544-8335 Fax.03-5544-8336 hola@hispanica.org

# “生きた”ポルトガル語が 身に付く。



ブラジルでビジネスや生活をする上で欠かせないのがポルトガル語です。

BrAsia(ブレイジア)では、赴任前と赴任後の語学研修を提供します。

講師任せにはしない!現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

**BrAsia(ブレイジア)の研修プログラム**

■ **赴任前ブラジル・ポルトガル語短期語学研修(30~50時間)**

現地着任前に最低限の準備を! →国内ですべきは独学の準備と自己紹介、タクシー移動もスムーズ!  
※企業への講師派遣(首都圏・名古屋地区・京阪神)も可能です。

■ **ブラジル異文化概論&マネジメント講座(半日~1日)**

ブラジルの文化、ビジネスの課題を解決! →労働争議は日常茶飯事?各分野の専門講師が課題を紐解きます!

**ブラジルで学ぶ! 短期語学研修プランもご用意!**

■ **サンパウロ市内提携先での現地語学特訓コース(3~6か月)**

キャンパスライフは不要! できればマンツーマンで語学力を一気に高めましょう!

株式会社漢和塾 BrAsia(ブレイジア) 事業部 〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-7 銀座大栄ビル5階 TEL 03-4360-8627

お問い合わせはコチラ! E-mail: [brasia@kanwajuku.com](mailto:brasia@kanwajuku.com) HP: <http://brasia-j.com>



BrAsia代表  
 小川善久

大阪外国語大学  
 ポルトガル・ブラジル語学科  
 1987年卒業  
 この数年、年に2~3回のペースでブラジルに出張。サンパウロはじめ複数の主要都市を訪問。「事件は現場で起きている!」との考えで、研修会社の責任者としてブラジルを奔走中!



本場ブラジルの濃厚アサイーで、  
 おいしく健康な毎日を。



フルッタフルッタはパラ州のトメアス農協CAMTA  
 からフルーツ原料を直輸入しています。

製品のご注文は ☎ **0120-265-726**

受付時間:  
 平日9:00~18:00  
 (土日祝休)

ホームページからも  
 ご注文いただけます

フルッタフルッタ

検索

[www.frutafruta.com](http://www.frutafruta.com)

Stay Sustainable!



フルッタフルッタはアグロフォレストリーを通して環境と  
 経済が共存するグリーンエコノミーを実践しています。



# 新日鐵住金

あらゆるものづくりを支え、  
いつの時代も未来を拓く素材の主演、鉄。  
その大いなる可能性を極限まで追求し、  
日本と世界の発展、そして豊かな社会の創造に  
貢献することが、私たち新日鐵住金の使命です。  
世界最高水準の技術とものづくりの力で、  
もっとグローバルに、もっと先進の鉄へ。  
「総合力世界No.1の鉄鋼メーカー」をめざす、  
私たちの挑戦に限りはありません。

[www.nssmc.com](http://www.nssmc.com)

限らない  
鉄の未来をめざす。



世界の鉄へ

しんにつつすみきん